

イランにおけるフレグ＝ウルス遺跡調査報告

森 部 豊

A Report on Relics of the Ilkhanate in Iran

MORIBE Yutaka

This paper is a report of a survey conducted in Iran in September 2014 of archaeological sites from the Ilkhanate period. The Ilkhanate initially established its capital at Marage, subsequently relocating it to Tabriz and then to Soltaniyeh. In these cities, architectural ruins dating back to the period of Mongol rule have been preserved to this day, but are not widely known in Japan. The purpose of this paper is to introduce the Ilkhanate-period sites remaining in Iran, with the hope of contributing to future research on this subject.

本報告は、平成26年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究；研究題目「農業・牧畜境界地帯」から構築する新しいユーラシア史像の試み）により、2014年9月4日から14日まで（渡航に要した日数は省く）、イラン・イスラム共和国で行った調査の行動記録である。

「農業・牧畜境界地帯」という用語は、現在、東洋史学のある研究領域の中から提唱されている概念である。地理的には、黄河流域の北中国の農耕世界とその北に広がる草原世界との間に東西にのびるベルト地帯であり、農耕も可能であると同時に遊牧にも適した自然環境にある。唐代に例をとって説明すると、唐朝は草原世界の騎馬遊牧勢力をその統制下に置いた時、それらをこの「農業・牧畜境界地帯」に置き、騎馬遊牧集団の首領に唐朝の官職を与え、間接的に統治した。また、その騎馬戦力を利用し、対外拡張に利用した。すなわち、軍事力の供給地帯という役割を持っていたことになる。しかし、唐朝の力が弱くなると、軍事力の供給地であったこの空間から主体性をもった勢力が勃興することもある。五代時期の歴史を動かした沙陀がその一例といえよう。同じころ、現在の中国東北部で建国した契丹国は、燕雲十六州の割譲を通じ、「農業・牧畜境界地帯」を手に入れる。この時、この地にあった吐谷渾をはじめとする騎馬遊牧勢力を取り込んだのである。ただ、「農業・牧畜境界地帯」の遊牧勢力を、中国本土や草原世界の諸勢力が具体的にどのように利用し、彼らの勢力伸長にどのように寄与したのかについては、まだまだ不明な点が多い。

一方、ユーラシア大陸の東部地域において提唱されたこの概念が、ユーラシアの中央部や西部地域における歴史理解においても有効であるかは未知数である。本研究は、「農業・牧畜境界地帯」という歴史学的概念がユーラシアの西部地域でも有効であるかどうかという問題関心に基つき、特にイラン地域におけるモンゴル支配のあり方を調査した。本行動記録は、そのうちフレグ・ウルス時代の建造物とイランという空間の景観調査を記録したものである。

【行動記録】

9月4日（木） テヘラン→ヴァラミーン→レイ→テヘラン

10：53 エミレーツ971便でドバイよりイラン・テヘランのエマーム・ホメイニー空港に到着。ロスト・バゲージで荷物を受け取れず、機内持ち込みの必要最低限のもので調査敢行。

12：14 通訳ガイドのハミッド氏と合流し、チャーターしたタクシーでヴァラミーンへ向かう。ヴァラミーンはテヘランの南40キロほどのところにある町だ。テヘラン到着の印象は「かなり暑い」というものだった。テヘランの空港からヴァラミーンの間は、耕作地が続き、トウモロコシなどの栽培が見られる。13：18-13：50 ヴァラミーン市内で昼食。

14：06 ヴァラミーンの大モスクに到着【写真1】。フレグ・ウルスの第9代イルハンである

アブー・サイード（在位：1316～1335）の治世に建立されたモスクという。今回の調査時には、門は閉ざされ、管理人はいたものの、中に入ることはできなかった。本田実信『イスラム世界の発展』（講談社、1985）の135頁にかつての修復前の大モスクの写真が掲載されているが、2014年現在では修復工事が進んでおり、東・西と北の外観はきれいで修復が認められた。南側はもとのままで手がついていないようであった。修復する必要がないということなのだろうか。モスク東入口のエイヴァーン（イーワーン）には部分的に装飾タイルが残っている【写真2】。

14：29 大モスクの東、車で1分ほどのところにアラール・オッディーンの塔（Borje Ala Oddin）がある【写真3】。円柱形の塔身に円錐のドームがのっている構造。塔身の断面は、単なる円ではなく、三角形の二辺を連続させたギザギザ状である。円錐のドームのすぐ下の塔身上部には青色のタイルが残っている。14：40出発。レイ方面へ向かう。

15：09 ミールの丘（Tappe Ye Mil）に到着。ここは、ササン朝時代のゾロアスター教神殿の遺址。丘は湿地に囲まれている。仮設のような橋を渡って丘のふもとへ。さらに丘へ登る階段がある。丘の上の遺跡の大部分は、屋根で覆われて保護されている。この部分はかつて広間や部屋があったところ。ここを通り抜けると丘の上に出ることができ、そこに拝火神殿が復元されている【写真4】。15：43出発。

16：04 レイの町にあるトゥグリク・ベクの墓に到



写真1 ヴアラミーンの大モスク



写真2 ヴアラミーンの大モスクのエイヴァーン



写真3 アラール・オッディーンの塔



写真4 ミールの丘（ゾロアスター教寺院の遺址）

着【写真5】。ここも門が閉じられていたが、管理人の老人が開けてくれて調査可能となる。塔身の形はアラー・オッディーンの塔と酷似するが、ドームはない。塔にはアーチ型の出入口が東西にあり、塔を通り抜けることができる。東の出入口の少し外に立って見上げると、エイヴァーンの形がライオンに見えるという。塔の中は音が反響する構造になっている。塔を囲むエリアは緑豊かな庭園で、イチジクなどが実っており、管理人の老人からいくつかにいただいた。16：36出発。



写真5 トウグリク・ベクの墓廟

16：41 ラシュカーン城砦（Deje Rashkan）に到着【写真6】。パルティア時代の城砦という。もとは三重の城壁があったそうだ。今、残るのはそのうちの王宮部分だろうか。城砦は小高い丘の上にまで続き、見学用の階段が設置されている。ただ、イランの遺跡の階段は、ちょうど日本の工事現場で見られるようなパイプをつなぎ合わせ、木の板を踏板としてわたした構造であり、仮設なのかどうかも判然としない。案の定、丘の上に登る階段の途中が壊れており、少し危険な箇所もあった。ただ、丘の上に登るとレイの街並みが一望でき、また南と西の方角に別の城壁も目視できるなど、景観調査には最適なビュー・ポイントといえよう。17：00調査終了。テヘランへ戻り、投宿。ロスト・バゲージ、届かず。不安な夜を過ごす。



写真6 ラシュカーン城砦

9月5日（金） テヘラン→アラムート城→カズヴィーン

9：12 テヘラン出発。テヘランの標高は約1300m。ただし、これは宿泊ホテルの位置である。テヘランは南北方向に高低差があり、南のほうで1300～1400m、北の山側では1700mほどであるという。天気は良く、右手にアルボルズ山脈を見つつ、高速道路を西進する。テヘランの西、約80kmのところにあるカズヴィーンへ向かう。サファヴィー朝の都があった都市である。昨日のロスト・バゲージをホテルに届けてもらうため、パスポートとロスト・バゲージ証明書をホテルに置いておくためだ。10：48 カズヴィーン到着。書類を預け、11：08出発。

今日の目的地はアラムート城。アラムート城は、セルジューク朝時代に組織されたイスラーム教シーア派の中の過激派であるイスマーイル派暗殺者教団の本拠地だった所である。この暗殺者教団は、11世紀後半にハサン・サッバーフによって創設された。彼は1090年にアラムート城を占拠し、ここを居城としたという。この教団は、13世紀半ばまで活動しつづけるが、モンゴルがイランを支配する過程で討伐される。1256年に教団最後の教主のルクン・ウッディーン・フルシャーがモンゴル軍に投降すると、アラムート城もモンゴル軍に下り、そしてモンゴル軍の略奪と破壊を受けた。

アラムート城へは、カズヴィーンの北に連なるタラガン山脈を越える。2255mほどの峠を越えると、一気に990～1000mほどの低地まで下る。タラガン山脈の北側がアラムート地方ということである。この後、1500mほどのところまで移動し、昼食。アラムート地方は、オアシスが点在しているイメージで、灌漑がひかれているところでは、水田もみられた。

13：55 アラムート城に到着。ただ、城砦そのものは切り立った岩山の上であり【写真7】、車は麓のチケットオフィスまで。このあたりで標高1915mほど。アラムート城のある岩山は南北軸400m、東西軸700m、高さ200mという。チケットオフィスはおおよそ岩山の西に位置しており、チケットオフィスの場所からアラムート城の城門入口の崖の下までは、岩山の麓を大きく北へまわりこむ。歩いて向かう



写真7 アラムート城遠景



写真8 アラムート城城門



写真9 アラムート城頂上の貯蔵庫と貯水池

か、あるいは観光用のウマやロバに乗っていくこととなる。現在では、岩山の急峻な崖に作られた階段（観光用）があり、これを登っていくと、アラムート城の城門にいたる【写真8】。これはアラムート城の下城の入口で、セルジューク朝時代の建造物という。アラムート城は下城と上城とからなっている。はじめの城門をくぐって少し階段を上ると下城に出る。ここは上城より低い。下城には見張り用のテラスがある。さらに観光用階段を登っていくと上城の城門があり、ここをくぐるとモスクと中庭の遺構がある。現在は、保護のためか、屋根がかけられている。ここを進むと岩山の頂上部分に出る。ここには穀物を蓄えた倉庫や貯水のプールなどの遺構が残る【写真9】。そのさらに北側は、少し低いテラス状となっていて、そこに北城が築かれている【写真10】。現在は、危険なためなのか立ち入りはできない。15:33 調査終了、出発。17:46 カズヴィーンのホテルへ到着。行方不明だった荷物も、その直後に無事、届けられた。



写真10 アラムート城北城

*アラムート城の参考文献：本田実信『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会、1991）193-196頁

9月6日（土）カズヴィーン→ゴンバデ・ソルターニーエ→タフテ・ソレイマーン→タカブ
9:00 出発。高速道路で西北方向へ向かう。このルートは、テヘランとタブリーズを結ぶ幹線である。カズヴィーン付近は畑が広がる。確認できたのは、トウモロコシ、ブドウである。10:41頃、高速道路進行方向の左手に青い屋根を持つ建物が遠望できる。ゴンバデ=ソルターニーエ（Gombad-e Soltaniyeh）である。高速道路から外れ、10:56到着。

ソルターニーイエは、フレグ・ウルス第8代イルハンのオルジェイトウ（在位：1304～1316）が建設した都である。ここは、モンゴル語でクンクル=ウラーン（「黄褐色の草地」の意。ペルシャ語でシャルーヤーズ）と呼ばれ、モンゴル人の夏营地であった。かつては城塞とそのまわりに町があり、



写真11 オルジェイトウの墓廟

それらを外城壁が囲んでいた。城塞の中にはオルジェイトウの墓廟が建設された。この建築物は八角形の大ドームで、その周囲にはモスク、宴会場、聖裔の館が建設されたという。また、町にも多くのモスクがあり、病院、学院や有力者が建造した大型の建築物があったという（本田実信『モンゴル時代史研究』343-356頁）。

現在ではオルジェイトウの墓廟を除いて、ほとんど何も残存していない【写真11】。ガイドブックなどでは「ゴンバデ=ソルターニーイエ」と紹介され、世界遺産となっている。現在の墓廟を中心としたエリアは、かつては石積みの城壁で囲まれていた。今は城壁の基部から高さ数メートル部分が残っており、また馬面のような半円形のでっぱりが確認できる【写真12】。杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』（講談社、2008）のカバー表紙には、1968年に撮影されたというオルジェイトウ廟の写真が使われているが、2014年9月の段階ではドーム部分の修復は終了しており、青い色を基調とした色タイルに覆われ、外観はきれいになっている。現在は内部の修復に入っており、足場が組まれており、内部の装飾のすべてを見ることはできない。それでも側壁の一部は見る事ができる。廟の内部には上の階へ登る階段がある。一層登ると、廟の内側をぐるりと一周する回廊になっており、そこではタイル装飾をみることができる。さらにも



写真12 オルジェイトウ墓廟城壁遺址

う一層上に登ると、廟の外をめぐる回廊にでる。ここの装飾は、レンガに色をつけ、漆喰と組み合わせて模様をえがいている【写真13】。墓廟の周囲には、住居や浴場などの遺構がある【写真14】。13：01出発。

ついで、タフテ=ソレイマーン（Takht-e Soleyman）へ向かう。ザンジャーンの街から高速を下りて、タカブへと向かう山岳地域を走るルートに入る。地図上では、ざっと二つの大きな山脈を越えていく感じだ。15：50にタフテ=ソレイマーンが見える地点に到着するまで、1900

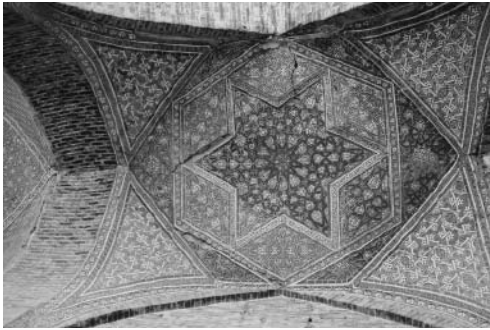


写真13 オルジェイトウの墓廟外回廊の装飾



写真14 オルジェイトウ墓廟周囲の遺址



写真15 タフテ=ソレイマーンとその周囲の景観

～2500m くらいの高度を移動。この間、谷間には樹木を確認することができる箇所もあるが、丘陵部分には木は全く見えない。途中では、亜鉛の採掘場があった。

タフテ=ソレイマーンは、標高2120mに位置するゾロアスター教の聖地である。アラビア語で「シーズ」といい、タフテ=ソレイマーンは19世紀以降の綽名である（青木健『ゾロアスター教の興亡』刀水書房、2006、43頁）。この遺跡は円形の城壁（ササン朝時期造営）で囲まれている【写真15】。現在は、世界遺産になっている。円形城壁の南に二つ門がある。現在の入城門はモンゴル支配時代に建造されたもので、この門の東にササン朝時代の城門も残っている。城壁内のやや南寄りに人造湖がある。水深は深く、平均60mほどという。湖の透明度は高いと思われ、少し離れてみると、青黒くみえる。湖の北側にはササン朝時代の建築群の遺構があり、ここにかつてのゾロアスター教寺院もある。湖の西側にある建築群の遺構がモンゴル支配時代のものであり、現在、その一つの建物が復元され、ちょっとした博物館になっている【写真16】。フレグ・ウルス第2代イルハンのアバガ・ハン（在位：1265-1281）の時に、この地は夏営地となり、その時にサマーパレスが建造された。18：00出発。18：41 タカブに到着。



写真16 タフテ=ソレイマーン内のモンゴル支配期の建築群遺構。中央の屋根のかかっている建物が復元された博物館。城壁の左門がモンゴル時代のもの。右はササン朝時代の門。

9月7日（日）タカブ→マラゲ

8：49 ホテル出発。マラゲへ行く途中までは高原上の丘陵地を走る感じ。標高1900～2100m くらい。マラゲ付近はもっと高度が下がり、1300m くらいか？ 11：54 マラゲの街に到着。そのまま市街地を南へ抜ける。

12：03 Varjuyi 村に到着。Maabad-e Mehr-e Varjuyi という石窟神殿遺址がある。【写真17】神殿の形状とデザイン、地下に造営されたこと、ドーム式の部屋ということから、Mehr という大地の神を祭った神殿であると推測できるという。パルティ



写真17 Maabad-e Mehr-e Varjuyi

ア期からササン朝期まで神殿として利用されたいが、イスラーム時代に破壊されたという。この神殿は岩盤を開鑿して造営されていて、大きなほぼ円形のホールが南北に四つ並んでいて、最も北に位置する第一ホールに入口がある。現在の地形では、ホールは半地下になっているが、それが当時の状態なのかどうかは判然としない。第一ホールの、向かって左手（東）に、やや小さいサイズのホールがあり、第一ホールとつながっている。またこの小ホールは、第二ホールとも直接、つながっている。第二ホールには、それとは別に二つのホールが東西にある。西のホールの入口にアラビックで何かが書かれている。第三ホールと第四ホールには付属のホールはないが、小部屋みたいなものがくっついている。第四ホールが祭壇なのだろうか。各ホールの天井には穴が開いていて太陽光が差し込むが、もとはドームがあったという。12：30調査終了。市内へもどる。

昼食後、市内調査。マラゲはフレグ＝ウルス初代のフレグ・ハンが都にしようとした街であり、現在、セルジューク朝期からフレグ＝ウルスにかけての遺跡がいくつか残っている。

まずは、**Gonbad-e Surkh**【写真18】。マラゲ市街の東南部に位置する。きれいに整備された公園の中に保存されている。これはセルジューク朝期のヒジュラ暦542（西暦1148）年に Abd-ol Aziz ibn Mahmud ibn Sa'd の命令によって建造された塔で、建築資材は焼きレンガである。遠くから見ると赤っぽく見える。土台は石で組まれ、その上に方形の本体が造られている。その上部は八角形で、その上にドームがある。ただ、現存するドームは、本来のドームの内側（天井）に相当する部分らしく、本来はこの外側に一回り大きいドームがあったという。建物の正門は北側に設けられているが、中には入れない。正門の上部は青色のタイルとレンガおよび漆喰による工芸で装飾されている。またレンガで銘が書かれている【写真19】。また、Gonbad-e Surkh の道路をはさんだ北側には、「石の博物館」があるようだが、残念ながら閉館していて調査できなかった。



写真18 Gonbad-e Surkh



写真19 Gonbad-e Surkh の正門部分

13:49調査終了, 続いてマラゲ市街の西北に位置し, マラゲの西を流れるサフィ川沿いにある Gonbd-e Ghaffariyeh へおもむく【写真20】。この建造物は, フレグ=ウルス最後のハンであるアブー・サイード(在位: 1316-1335) によってヒジュラ暦725年から728年(西暦1325~1328)の間に建造されたという。建物は立方体で, 石の台の上に建てられており, 四隅はレンガで柱風に裝飾されている。正門は北側にあり, 入口の上部に青と黒のタイルで銘が書かれている【写真21】。建築家は Nezamoddin Ahmad ibn Hussein Al Ghaffari である。



写真20 Gonbd-e Ghaffariyeh

14:19 近くのマラゲ博物館へ行く【写真22】。ところが, 14:30で閉館だという。急いでみる。ここは, フレグ=ウルスに特化した博物館で, 展示物はすべてフレグ=ウルスのもの。日用品の素焼の土器, 陶器, コイン, ガラス器, 刀剣などがそれぞれ展示されており, 小さいながらも見ごたえがある。14:36 短い時間だが, 調査終了し, マラゲ市の西郊外にあるフレグ=ウルス期の天文台遺址へ向かう。

14:46 天文台遺址【写真23】は, マラゲ市街から西へ2kmほど離れた丘の上に位置する。

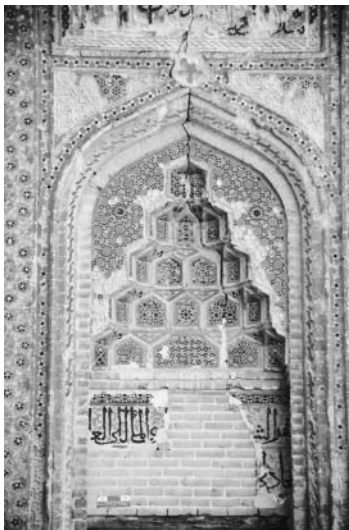


写真21 Gonbd-e Ghaffariyeh 正門
上部の裝飾



写真22 マラゲ博物館内の展示

高度は1520～1530mくらい。現在、遺跡全体を覆うように白い半円球のドームが建設されている。ドームはパフレヴィー朝時代に造営されたという。このドームの中に入ると、かつての天文台の遺跡が保存されている。



写真23 天文台遺址全景

この天文台は、フレグ（在位：1258-1265）の命令により、バルシア人科学者のナーシル・アッディーン・トゥーシの設計・監督

のもと、ヒジュラ暦657（西暦1259）年に建設されたという。ここには当時の著名な科学者が集結し、教授のほか天文台の運営にもたずさわった。建設には15年の歳月がかかり、またフレグはバクダードを攻略するや、そこにあった書籍と天体観測の道具を持ち帰ったという。このマラゲの天文台は、大元ウルスの都、大都にあった回回司天文台と相互に学術交流していた。現在残る遺構は、円形の石の礎石と南北軸の礎石、そしてその一番南の部分にある円周の一部を切り取ったようなレール（溝）などである【写真24】。このドームの外側にもかつての建物の遺構があり、平面上の天文台遺址はかなり広い。

15：19市内へ戻り、ホテルへチェックイン。フロントで、マラゲの地図をもらって見ていると、市内にまだ行っていない歴史的建造物があるらしいことが判明。ただちに再出発。市街地のほぼ真ん中に、Gonbad-e Kabudがある。ここが先にいったのとは異なり、当初、リクエストしていたものだった。

Gonbad-e Kabud【写真25】は、マラゲ市街のほぼ中央に位置する。この場所には、二基の塔があり、南北方向に並んでいる。一つは円柱形、もう一つは八角柱形である。このうち、八角柱形のものがフレグ＝ウルス初代ハンであるフレグの母の墓廟と伝えられる。ともに建造年代ははっきりとせず、セルジューク支配時期のものと推測する研究者もいれば、モンゴル支配期のもだという研究者もいる。塔はともに土台は石。入口はともに西を向いている。円柱形の塔のほうは、入口のみタイルで装飾しているが、そのほかの部分はレンガである。八角柱形の塔もレンガで建造されているのは同じだが、塔の側面すべてに青色のタイルを用いて装飾が施されている。

9月8日（月）マラゲ→アク＝ゴンバド城→タブリーズ

8：25 ホテル出発。マラゲを出発し西進。マラゲの街をでると、周辺は木々の無い風景に



写真24 天文台遺址（ドーム内）



写真25 Gonbad-e Kabud 右がフレグの母の墓廟と伝えられるもの

変わる。道路は開けた平原の真ん中を走っているが、両サイドの遠くには山地が連なっており、広めの「回廊」といったところだろうか。8：40ボナブ（Bonab）で北に進路を変え、北上する。ちょうど、オルミーイエ湖の東を通るルートになる。右手すなわち東側には山地が走るが、左手すなわち西の湖側は平らだ、湖は見えないものの。かつてのフレグ＝ウルスの人々もこのルートをたどってタブリーズへ移動したのだろうか？

この日の最初の目的地は、アク＝ゴンバド城。山上に城砦の遺址があり、またフレグ＝ウルスの歴代ハンの墓があるともいう。場所はオルミーイエ湖を望む場所だという。9：38 オルミーイエ湖の東を南北に走る幹線道路からはずれて西に折れ、湖へ向かう道路を西進する。周囲は一面平らで、最近まで水があったのではとも思える。しばらく行くと、前方（西）にうっすらと山が見えてくる。かつてはオルミーイエ湖に浮かぶ島だったのだろう。目指すアク＝ゴンバド城は、この山（島）の反対側らしい。道路は、この島の南側をぐるりと半円を描くように走っている。島の西側へ出ると、橋が見える。対岸は西アーゼルバイジャン州のオルミーイエである。我々はこの橋を渡らず、島の西沿岸を北上する。すぐに集落がある。ここがアク＝ゴンバド村らしい。人がおらず、道がわからない。とある一軒の家を訪ね、アク＝ゴンバド城の場所を聞かすが、要領を得ない。村の北のほうへ行くと、山側に入るらしい。よくわからないまま、湖に沿って少し北上し、道が分かるところで、山側（東方向）へ入っていく。おそらく雨が降った時には川となるような山間の道を進むが、石だらけの道で、車も容易には進めない。やがてごつごつした岩だらけの場所となり、途中でとうとう進めなくなり、歩いて前進する。が、結局、何も無く、断念して戻る。

再び村を通ると、今度は何人かの男の村人と出会う。改めて城への道を聞くと、ようやく正確な城への道の情報を得ることができた。それによれば、村はずれの南北に、村をぐるっと回る道があるようで、この二本の道が村の東でつながっている。そこに地下水の湧き出る場所があり、そこから見える右手の山の頂上にアク＝ゴンバド城があるという【写真26】。さっそく出発。

はたして水の湧き出るところがあり、ちょうど放牧帰りなのか、ヒツジとヤギの集団がたむろしていた。群れを領導している老人に道を聞くと、南側に見える岩山を上まで登り、尾根伝に行けばたどり着けるという。早速登っていく。山の中腹にある岩山のテラス状のところまでたどりついた時、尾根にいる放牧中のヒツジ群に気が付く。望遠鏡で確認すると牧羊犬もいるようだ。前日、車で走行中、放牧中のヒツジの群れを横切った際、牧羊犬に車が威嚇されたこともあり、一人での登山を途中で断念し、下山。ただ、山の中腹まで登ってみたアク＝ゴンバドの景観は、東西方向にはしる二本の山地に挟まれたほそ長い空間で、地表面に水は流れていないものの、地下水は豊富で、木々も茂り、現在では農耕地もある【写真27】。ここは、ちょ



写真26 アク=ゴンバド村東郊の山。村人が言うには、城砦はこの山の頂上のもう少し奥にあるとのこと。



写真27 アク=ゴンバド村とオルミーエ湖を望む。中央部の黒っぽい所が、灌漑された村落部分。その周囲は荒涼としている。

うどマラゲあるいはタフテ=ソレイマーンからタブリーズへと向かうルートの途中にあり、フレグ=ウルスの人々がこの地を好んだとしても不思議はない感じがした。

13:00 アク=ゴンバドを出発し、タブリーズへ向かう。途中、島の東岸で昼食をとり、15時ころ、タブリーズに到着。15:04アゼルバイジャン博物館に到着。

アゼルバイジャン博物館は、一階には先史からササン朝までの文物が展示され、二階にはイランを支配した歴代王朝のコインと陶磁器との展示室がある。地下にも展示室があるが、ここは博物館の展示物がいかに復元されたのかを紹介するコーナーである。また、博物館の東側の外庭は石刻の展示コーナーとなっており、フレグ=ウルス、サファヴィー朝、カージャール朝各時代の墓石などが展示されている【写真28】。

アゼルバイジャン博物館の東隣がMsjed-e Kabud(ブルーモスク)である【写真29】。このモスクはカラ=コンユル朝(1375-1468)時代の建造にかかる。Kabudすなわち濃紺のタイルで装飾されていたが、地震でかなりの部分が崩壊し、現在でも修復が継続されているようである。ここは、モスクと墓廟が隣り合わせて建っており、モスクへの入口は北にあり、墓廟は南側に位置する。17:11調査終了し出発。

17:20 Boq-e Ye Seiyed Hamzeh(セイエド=ハムゼ廟)【写真30】到着。個人的感想だが、建物それ自体は、ぱっとした印



写真28 アゼルバイジャン博物館



写真29 タブリーズ・ブルーモスク



写真30 セイエド=ハムゼ廟



写真31 ラシード区内の遺構



写真32 ラシード区を道路から眺める

象はない。門は南に位置する。入口の門のところにミナレットが一本立っているだけだ。門をくぐると中庭を囲んで、建物がぐるりと囲んでいる。中庭の東の建物が廟であり、ここは男女入口が異なる。廟内も幕で仕切られ、男女が一緒になることはない。廟内の装飾は派手で、天井などは銀色に輝いている。壁画や聖人の墓がある部屋に通じる部分の扉などはサファヴィー朝時代のものらしい。

17:55 Rab-e Rashidi (ラシード区) に到着。フレグ=ウルスのガザン・ハンの時代、タブリーズの東郊に宰相ラシード・ウッディーンによって建設されたという宗教や学術施設があったエリアだ。現在、発掘されているが、地表面に見える遺跡はサファヴィー朝のものであるという【写真31】。ここは、日本出発前に、中に入ることができるか、念をおして確認をとったものの、現地に行ってみれば、門は施錠され、中に入ることができず、悔しい思いをした【写真32】。ラシード区は、もとはタブリーズ郊外にあったが、現在では市街地が広がり、その中に埋没している。

この日の最後に Arge Alishah へ行く。ラシード区からここまで、市街地域が渋滞でなかなか進まず、18:40ようやく到着。Arge Alishah はオルジェイトに仕えた宰相タージュ・アッディーン・アリー・シャーによって建設されたモスクの遺構である。現在では、ドームが崩れてしまっており、南壁が一面のみ残っている状況である【写真33】。この遺跡の周囲の状況は、観光地としては整備されていないようである。南側は2014年9月の段階で、何かの建物を建設中で建築資材



写真33 Arge Alishah

が置かれている。遺跡の北側は、広場になっている。西側は道路、北も道路だが、遺跡と北側の道路との間に相当距離があり、駐車するスペースとなっている。

9月9日（火）タブリーズ→シス村→テヘラン

8:49出発。この日は、まず Masjed-e Jame 【写真34】 へ向かう。朝早いので、市街地の混雑もなく9:10到着。西に位置する門から入る。二本のミナレットを備える。門をくぐると中庭で、北側に学校、南側にモスクがある。学校は授業中だったが、こちらに気付いた生徒が手を振ってくる。モスクは施錠されていて中には入れなかったが、窓ガラス越しに中を見ることができ、ミフラーブとその周りの装飾を遠望できた【写真35】。

Masjed-e Jameの東側に、タブリーズのバザールがある【写真36】。世界遺産にもなっている。バザールは拡張を続けていて、古いバザールの周囲に現在の建物が増設されている感じだ。古いバザール地区に入ると、雰囲気さがらりと変わる。バザール全体は一つの建物で、通路の所々にドーム天井があって、採光の穴があげられている。現在では電気の光が通っているが、それでもドーム天井の採光口から注ぎ込む光は、古いバザールの雰囲気を、より一層高めてくれている。バザール内は縦横に通路が走り、同じ品物を扱う店が集中している構造



写真34 タブリーズの Masjed-e Jame 入口（中庭より撮影）



写真35 Masjed-e Jame のミフラーブと装飾



写真36 タブリーズ・バザールのかつてのキャラバンサライ



写真37 Onbne-Ali va Zaid Ebne Ali

だ。通路脇にはサライが併設されている。現在では住居や荷物置き場となっているが。10:27出発。

次の調査地は、タブリーズ市街地の北側にそびえるエイナーリーという山の頂上にある聖者の廟（Onbne-Ali va Zaid Ebne Ali）【写真37】。11:10到着。ここにはもともとイスラームの聖者の墓があったらしいが、フレグ=ウルス時代に廟が建造され、それが現存している。調査時点では修復中であった。この廟からはタブリーズ市街地が一望でき、景観調査にも便利である。

次の市内へもどり、ガーザーニーヤ【写真38】へ。タブリーズ市街区の西にあたる。12:13ころ現地に到着。ガーザーニーヤは、フレグ=ウルスのガザンがタブリーズ西郊に建設した文化施設。彼の墓廟もここに作られたという。現在は何も残っていない。ただ、情報を得ようと聞いた人が父祖代々この地に住む人だったので、彼からガーザーニーヤの情報を聞き出した。



写真38 かつてのガーザーニーヤ区に立つモスク。この建物の基礎の部分は、フレグ=ウルス時代の石を使用しているという。

現在では、モンゴル時代のものは何も残っていない。この付近の建物は、今から40～50年くらい前に建て直されているが、それ以前の建物はフレグ＝ウルス時代の石材などを利用してつくっていたという。また、彼は近年、この付近で建築物を建設した際、「ガザン」の名が刻された何かが発見されたという。少し、眉唾ものかなと思っていたら、フレグ＝ウルス時代の青タイルをポケットから取り出してきた【写真39】。



写真39 ガーザーニーヤ区の地元住民が有する青タイル。フレグ＝ウルス時代のものであると信じている。

昼食後、13:30タブリーズ西北のシス村へ向け出発。この地にもフレグ＝ウルス時代の建造物があるということで調査に赴く。14:27 シス村到着。村の中の広場に面して、モスク【写真40】がある。レンガ作りのモスク。アク＝コユニル朝時期のものという情報もあるが、ガイドの見立てではセルジューク朝最初期のものではないかという。しかし、具体的時期は不明。シスにはマザールもある。Seiyad Esmailのマザール【写真41】。2014年9月の時点では、マザール周辺をきれいに整備していた。



写真40 シス村のモスク

9月10日 テヘラン→シーラーズ

テヘランから飛行機でシーラーズへ移動。シーラーズはザンド朝が都を置いたところである。市内には世界遺産のエラムガーデンのほか、イランを代表する詩人のハーフェズの廟、ザンド朝時代の Masjed-e Vakil やキャリム＝ハーン城砦、シーア派の聖地にして巡礼地であるシャー・チェラーグ廟



写真41 シス村・Seiyad Esmailのマザール



写真42 シーラーズの金曜モスクにある「神の家」

がある。

シーラーズでの調査地点は、金曜モスク。シャー・チェラグ廟の南側に隣接しており、最初は廟のほうから入る。シーラーズ最古のモスクといわれ、創建は9世紀に遡るといふ。ただし、現在のものは、多くはサファヴィー朝以降のものであるらしい。モスクの中庭をはさんで、東西南にそれぞれエイヴァーンがあり、建造年代も違うようである。重要なのは、中庭にある建物。これはフレグ=ウルス末期の1351年の建造物である【写真42】。メッカのカーバ神殿のように作ったという。

9月11日 シーラーズ郊外

この日は、シーラーズ郊外のペルセポリス、ナグシェ=ラジャブおよび市内のパールス博物館を調査。

9月12日 シーラーズ→イスファハーン

朝、8時26分出発。途中、ナグシェ=ロスタムに立ち寄る。キュロス2世の墓があるだけかと思いきや、アケメネス朝の都が置かれていた場所で、その遺構が広範囲に点在している。車

でまわって調査をしたが、かなりの時間を費やすことになった。11時49分出発。途中、昼食をとる。シーラーズとイスファハーンを結ぶ街道沿いには、いくつかの荒廃したキャラバンサライの遺構が見られ、そのうちの一つに立ち寄って見てみる【写真43】。

16時40分ころ、イスファハーン到着。サファヴィー朝時代に建造された橋を見てホテルへチェックイン。

9月13日 イスファハーン

イスファハーンはサファヴィー朝が都としたところで、エマーム広場とその周囲に建ち並ぶ世界遺産のモスク、宮殿などが著名である。

ところで、イスファハーンでの調査の最大の目的は金曜モスク【写真44】である。イスファハーンの花曜モスクの歴史は古く、9世紀にはこの地にモスクがあったという。その後、拡張・増築され、現在の姿になっている。フレグ＝ウルス時代の部分もいくつか残存している。たとえばオルジェイトウ建立のミフラーブである【写真45】。



写真43 キャラバンサライの遺構



写真44 イスファハーンの花曜モスク



写真45 イスファハーンの金曜モスク・オルジェイトゥ建立のミフラーブ

9月14日 テヘラン→帰国

イラン考古学博物館，アーブギーネ博物館を調査。この日，夜の便で，ドバイ経由で帰国。

【用語補足】

金曜モスク：羽田正『モスクが語るイスラム史』（中央公論社，1994）によれば，「イランでは町に複数の集会モスクがある場合，その町で最初に建てられた由緒ある大モスクだけが特に金曜モスクと呼ばれる。そしてこの金曜モスクも含めてすべてのモスクがマスジドと呼ばれる」（13頁）という。

